

## シティズン社会化と参加

大学生協連会長理事 庄司興吉

### 1 長引く遺書

皆さん、おはようございます。前回理事会での私の挨拶にかんして、「あれは遺言ではないか」と心配していただいたり、あるいは「これで毎回の挨拶を聞かなくてよくなる」と喜んでいただいたりしたということで、どうも有難うございました。今のところ身体の特定期位に深刻な問題があるわけではないのですが、2400年ほど前にギリシャに行った時に——輪廻転生でそのとき私は犬だったように思いますが——知り合ったディオゲネスと言う男——元祖ストリート・ピープルのような薄汚い男ですが——が身近に出没するようになり、「お前もそろそろ何とかしろ」と迫ってくるのです。

これはなぜかという、ディオゲネスは元祖世界市民などといわれていて、私が世界市民、地球市民などといってきたからであろうと思います。そういわれて死ぬ前に考えていることをまとめておかなければと、遺書を書き始めているのですが、書き出すと長いのです。なかなか終わらなくて、終わらないうちには死ねないと思っているのですが、このあいだ一週間ほど山にこもり、行者のような生活をして、だいたい書く内容と形式はわかってきました。でもじっさいに書くのには、まだ時間がかかりそうです。

このかんに私に何か事故があったらどうするかということですが、濱田副会長には共済連のほうをやっていただくことになりましたので、副会長は今年度で終わりです。そこで和田専務に相談し、何か起きたときの代役を探していましたが、やっと見つかりました。現在、東大教養学部にいらっしゃる古田元夫先生で、ご存知の方も多いと思いますが、ヴェトナムの専門家です。

ヴェトナムといっても、ここにいる学生諸君にはとくになんの感慨もないかもしれませんが。しかし、私などの世代にはある時期、人類の夢でした。1960年代から70年代にかけて、ヴェトナムは、世界の被抑圧民族・被抑圧階級を代表するような形でアメリカと戦い続けており、中国とソ連も喧嘩しながらもなんとか支援を続けていました。先進国の労働者・市民・学生・知識人も支援を続けており、それらの支援を背景にして、ヴェトナムはアメリカに徹底抗戦し、最後に勝ったのです。

アメリカを追い出した。アメリカが戦争で負けたのは歴史上初めてですから、偉大な事業を成し遂げたことになります。ヴェトナムに今行ってみると、近代化に夢中で金のことしか考えていない人がほとんどで、あまり良い感じはしないのですが、人間いろいろ面があるのが当然ですから、現在の局面だけで判断してはならないでしょう。あの時期のヴェトナムは、世界中の労働者・市民・学生・知識人の支援を背景に、多大な犠牲を出しながら先頭に立ってアメリカと戦い、人類史に新しいページを開いたのです。

古田先生は、そのヴェトナムの専門家です。私の弟分という失礼になりますが、ヴェトナムでは古田先生のお世話になって、いろいろな方に会って話をうかがわせていただきました。古田先生は、東大で、副学長なども経験され、現在は図書館長を務めていらっし

やいます。私などよりもはるかに人格円満で貫禄のある人ですから、皆さんにも気に入ってもらえると思います。今度の総会で理事になっていただき、お忙しいのですが、緊急の場合には私の代役を務めていただくこととなりますので、ご承知おきください。

## 2 シティズン社会化の趨勢：総会議案をめぐって

つぎに、このあいだの打ち合わせで総会の議案をいただき、前回の理事会でもすでに出していたわけですが、あらためて読んでみました。それについて、二つばかり申し上げたいことがあります。総会議案のどこそこを直せというようなことではなく、基本的な考え方や発想にかかわることです。

一つは、社会の動きということで、情勢をとらえて、それにたいして「大学生協は」という書き方をするのが当然なのですが、そのさいに、リーマンショックくらい不景気が続いていて学生の就職状況が厳しいと書くのは大切ですが、それと同時に、私がこの数年いろいろな機会に申し上げてきていること、いうなれば世界の大きな動きにもぜひふれてほしいと思うのです。とくに議案を起草している学生諸君にわかっていたきたい。

それは市民社会、といっても市民にはブルジョワとシティズンがありますのでその両方を含めてのことですが、とくにそのうちのシティズンにかかわる面の発展にかんすることです。ブルジョアとは大金持ち市民のことで、彼らは大きな事業を起こして大もうけをしている。これにたいして、シティズンとしての市民は、主権者として一人一票制で自分たちの社会のあり方行き方を決めていく。その傾向が強まっていくという意味でのシティズン社会化が、大きな意味での市民社会化の枠内で進んできているという認識をもっともってほしいということです。

そのために、日本だけではないのですが、シティズンの意思をできるだけ正確に政治に反映するような仕組みを考えていく必要があるのです。今の日本もそうっていないけれども、アメリカやイギリスですらそうではない。今いちばんそれに近いのは、ニュージーランドやドイツの仕組みです。20世紀は、ブルジョワとプロレタリアの対立で動いているように見えたのですが、じっさいはそうではなかった。ブルジョワとシティズンの対立をつうじ、後者がしだいに力を強めてきたのです。

21世紀をつうじてシティズンが世界中で力を強めていく。そういう動きが進んでいるのだということ、理解していただきたいのです。シティズンはこうして、自分たちの社会のあり方行き方を決めていくのですが、それと同時に自分たちでも事業をするようになる。今はNPOという言葉が普及していますが、その元祖は協同組合だった。19世紀の半ばにイギリスで始まった協同組合、非営利で自分たち自身の生活を維持するための事業、そういうシティズンの事業をやっていくのも、シティズンという意味での市民なのだということも含めて理解していただきたい。

大学の役割について、文科省その他がいろいろな文章で21世紀型市民の育成とっている。21世紀型市民とはどういう市民か。一見すると、グローバルな視野をもった市民というだけのように見えますが、そうではない。その中身は私のいうシティズンでなければならないのです。そして、市民の基本は自治です。大学のなかで自分たちの生活をめぐって自治を行なっているのが大学生協なわけですが、そういうことがもっと総会議案に感じられると良いのではないかと思います。

### 3 参加の意味：総会議案をめぐって (2)

もう一つは、ビジョンとアクションプランに掲げられている協同・協力・自立・参加の参加にかんしてです。議案書を協同・強力・自立・参加の軸に沿って組み立てているのはたいへん結構なのですが、最後の参加のところ、参加というと、社会参加とか環境運動へ参加とかをすぐ考えてしまう。しかし基本は、協同し、協力し、自立してやっというとするともっと組合員の参加が必要になる、だから組合員が生協を利用し、生協の運営に参加し、そして組合員としての自覚をもつ、そういう参加があくまでも基本なのです。

これが、私のいっているシティズンとしての自覚につながっていくはずですが、そういうことを、とくに生協にかかわる学生諸君・院生諸君に学んでもらいたい。たとえば、いま学生諸君の多くは就活で非常にたいへんですが、企業に雇ってもらおうとするのが今の就活です。しかし、ヨーロッパのある地域では、自分たちが起業していく、しかも協同組合方式で業を起こしていくことが多くなっている。大学で学んだことをもとにして、福祉関連、生活関連の事業を協同組合方式で起こしていくのです。そういうことこそ、参加の最高の具体化なのではないですか。

そのうえで、環境運動への参加や平和運動その他への参加も出てくる。そういうことがこれからの生協の筋になるのではないかと思います、私はビジョンとアクションプランをそういう方向でつくったつもりなので、その辺をもっと理解していただきたいのです。そういう意味で生協に参加することをつうじて、学生院生諸君は歴史を創っていく。そのことをもっと体で感じる、すなわち体感するということが、いま重要なのではないのでしょうか。

### 4 歴史を創る・再論

第二次世界大戦後、大学生協は、食うものもノートもなかったなかで、無我夢中でやってきた。学生運動の影響を受け、いつも学生運動がカッコ良過ぎるので、それにコンプレックスをもたされながらやってきた。しかし、学生運動は、自分たちこそ歴史を創っていくのだという自意識ばかりが過剰で、中身は今から見ると見当違いであった。それにたいして、大学生協は、福武会長の頃から、もっと地道に大学のなかで学生の生活を良くしていく、学生の生活と勉学を守っていくということを基礎にしてやり始めた。

そういうやり方が今でも続いているのです。そういう、コンプレックスをもつのもなく、自意識過剰になるわけでもなく、きちんとバランスの取れた形で、自分たちがいま歴史をつくっているのだという感覚が大切です。そういう意識を、生協にかかわる学生諸君、院生諸君、教職員の方はもちろん、生協職員がもつようになると、全体がもっと活気づいてくるのではないかと思いますので、そういうことを念頭に置きながら総会議案を議論していくよう務めていただきたいと思います。

とくにここを直せというのではないのですが、基本の考え方をもう少し考えていただくと良いと思い、申し上げました。以上が今日の私の挨拶です。